京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2018-3

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　二〇一八-三　上京遺跡

上　京　遺　跡

2018年

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

上　京　遺　跡

2018年

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

序　　文

京都市内には、いにしえの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、共同住宅建設に伴う上京遺跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

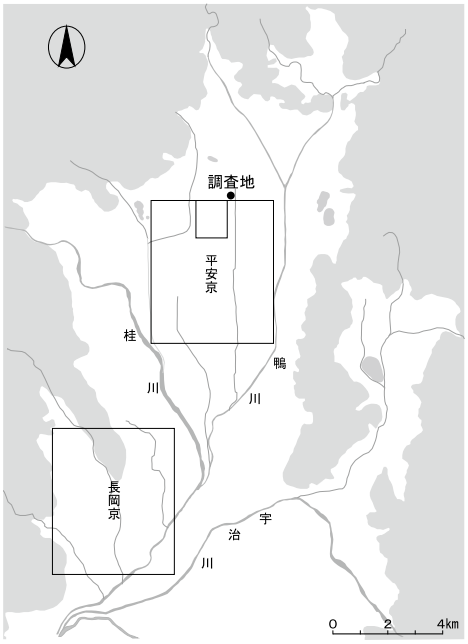
平成30年10月

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

所　長　　井　上　満　郎

例　　言

1	遺　跡　名	上京遺跡　（京都市番号　17 S 769）
2	調査所在地	京都市上京区元誓願寺通大宮東入寺今町510番、512番の1
3	委　託　者	日本ホールディングス株式会社　代表取締役　八尾浩之
4	調 査 期 間	2018年３月28日～2018年５月７日
5	調 査 面 積	約90㎡
6	調査担当者	末次由紀恵・モンペティ恭代
7	使 用 地 図	京都市発行の都市計画基本図（縮尺１：2,500）「船岡山」を参考にし、作成した。
8	使用測地系	世界測地系　平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
9	使 用 標 高	T.P.：東京湾平均海面高度
10	使用土色名	農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版　標準土色帖』に準じた。
11	遺 構 番 号	通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
12	遺 物 番 号	種類ごとに通し番号を付し、写真番号も同一とした。
13	本 書 作 成	末次由紀恵
14	備　　考	上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。



（調査地点図）

目　　次

１．調査経過 …… 1
（１）調査に至る経緯 …… 1
（２）調査の経過 …… 1
２．位置と環境 …… 3
（１）位置と環境 …… 3
（２）周辺の調査 …… 4
３．遺　　構 …… 5
（１）基本層序 …… 5
（２）遺構の概要 …… 5
（３）第３面の遺構 …… 5
（４）第２面の遺構 …… 9
（５）第１面の遺構 …… 9
４．遺　　物 …… 12
（１）出土遺物の概要 …… 12
（２）土器類 …… 12
（３）瓦類 …… 15
（４）石製品、銭貨、その他の遺物 …… 17
５．ま と め …… 19

図　版　目　次

図版１　遺構　１　第３面全景（北から）
２　第２面全景（北から）
図版２　遺構　１　石室40（北西から）
２　第１面北東部（南西から）
３　瓦敷41（北から）
図版３　遺物　土取穴群出土土器、出土瓦類

挿　図　目　次

図１　調査地位置図（１：2,500）　……　1
図２　調査前全景（北から）　……　2
図３　調査状況（北西から）　……　2
図４　調査区配置図（１：500）　……　2
図５　周辺調査位置図（１：5,000）　……　3
図６　調査区平面図（１：100）　……　6
図７　調査区北壁断面図（１：50）　……　7
図８　調査区東壁断面図（１：50）　……　8
図９　瓦敷41実測図（１：40）　……　9
図10　石室40実測図（１：40）　……　10
図11　土取穴群出土土器実測図（１：４）　……　13
図12　第１面出土土器実測図（１：４）　……　14
図13　瓦拓影及び実測図（１：４）　……　16
図14　石製品実測図（１：４）、銭貨拓影（１：２）　……　17
図15　土坑38出土焼壁土（壁土１）　……　18

表　目　次

表１　遺構概要表　……　5
表２　遺物概要表　……　12
表３　土器類一覧表　……　20
表４　瓦類一覧表　……　21
表５　石製品・銭貨・その他の遺物一覧表　……　21

上　京　遺　跡

１．調査経過

（１）調査に至る経緯

調査地は、京都市上京区元誓願寺通大宮東入寺今町地内である。当地は、室町時代以降に将軍邸である室町殿や武家屋敷、公家屋敷、寺院などが造られ、その周辺に市街地が形成された上京遺跡の南西部に位置する。

当該地にマンション建設が計画されたため、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「京都市文化財保護課」という）が試掘調査を実施した。その結果、中世の遺構が遺存していることが明らかとなり、遺跡の実態を把握するために発掘調査が必要と判断された。調査は公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が委託を受けて実施した。

（２）調査の経過

調査は京都市文化財保護課の指示に従い、敷地のほぼ中央に約90㎡の調査区を設定し、2018年３月28日から開始した。

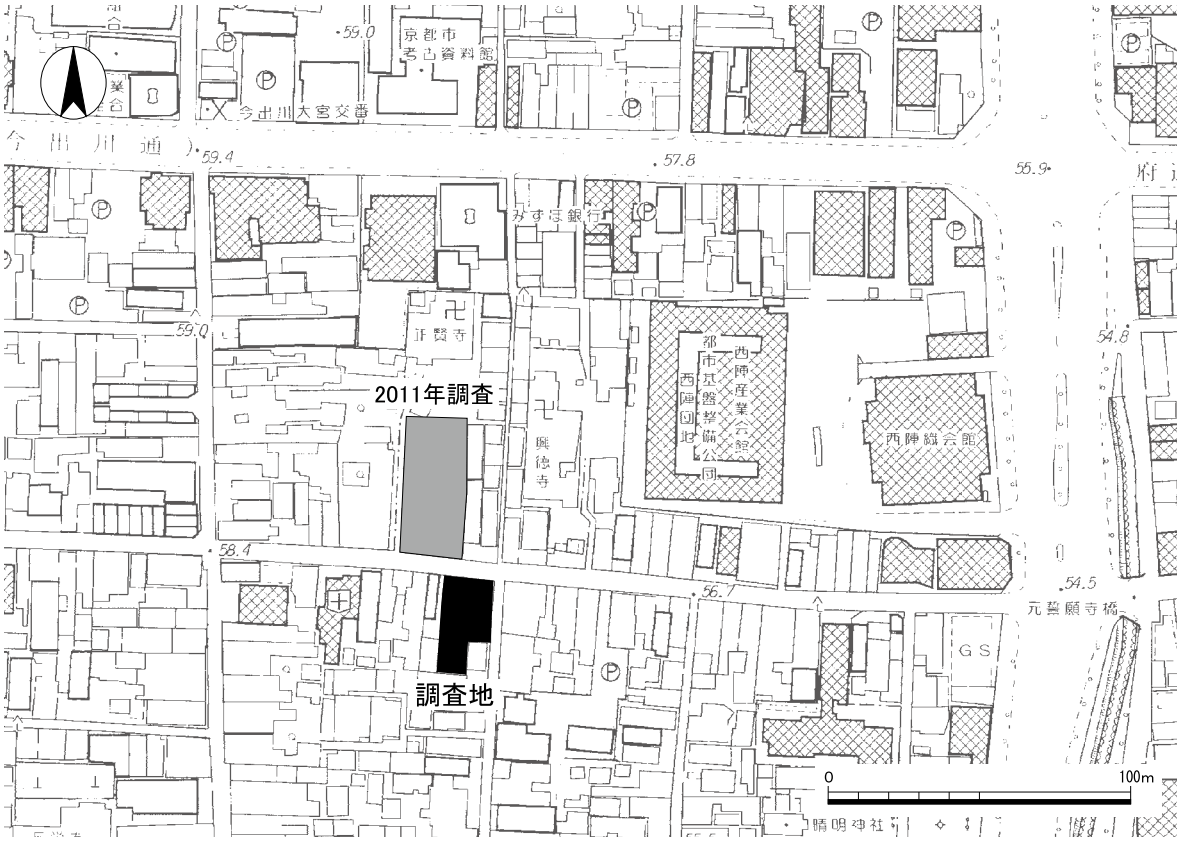


図１　調査地位置図（１：2,500）

図２　調査前全景（北から）

図３　調査状況（北西から）

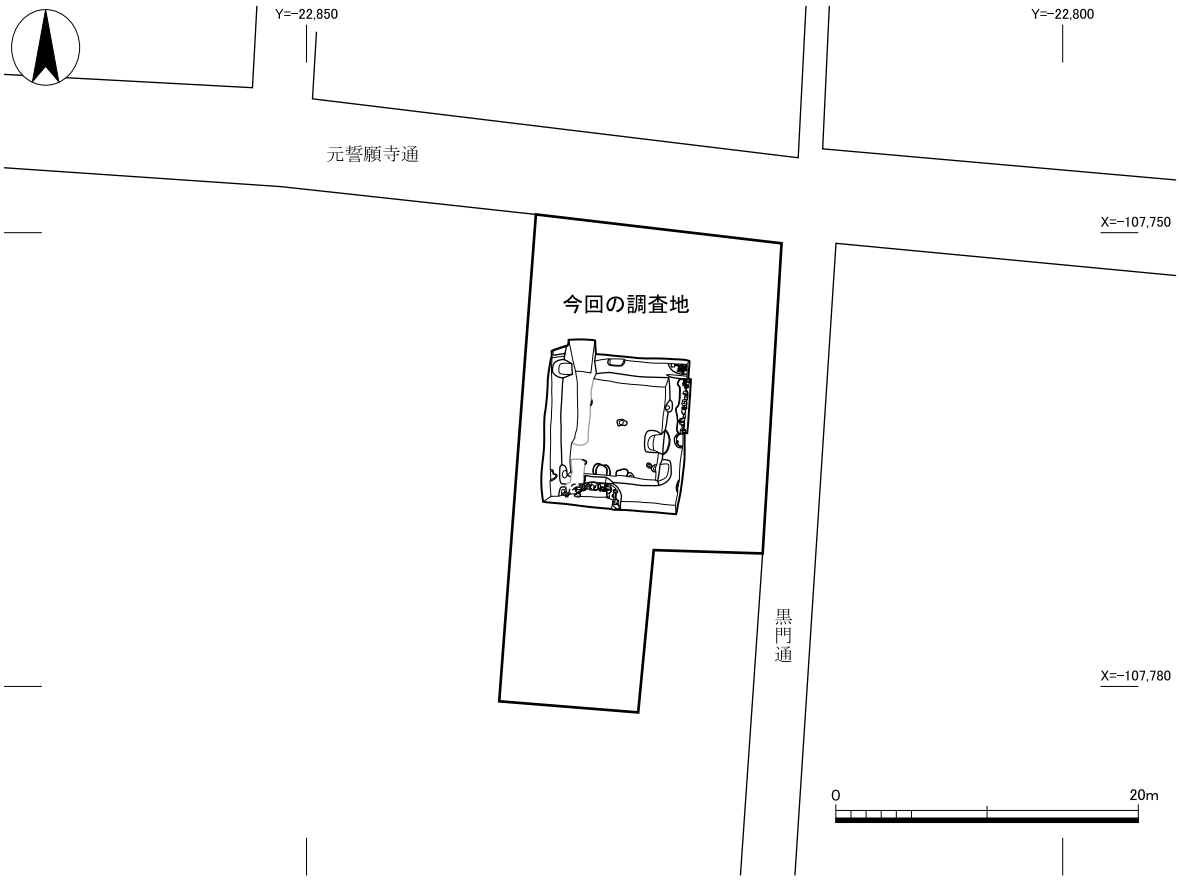


図４　調査区配置図（１：500）

調査は、試掘調査の結果から中世の遺構に重点を置き、地表面から室町時代の包含層上面まで、約2.0ｍを重機によって掘削することとした。途中、基盤層までの深さが3.0ｍを超えることが判明したため、調査中の安全を考慮し、地表面から約1.3ｍのところに幅約1.0ｍのテラスを四周に設けた。江戸時代の遺構については後世の攪乱により遺存状況が不良であったため調査対象外としたが、このテラス面で確認した遺構については調査を行った。

テラス面、包含層上面、基盤層上面でそれぞれ調査を行い、５月７日に全ての現場作業を終了した。

２．位置と環境

（１）位置と環境

調査地を含む平安京北郊は、平安京造営当初は園池司が管轄する園地であったが、その後、園地としてはしだいに衰退し、９世紀代からは天皇や有力貴族の別荘・別宅・寺社の用地としての開発が進んだと考えられている。淳和天皇の離宮である紫野院（雲林院）が造営されたのをはじめ、清和天皇皇子貞純親王の別荘であった桃園宮、のちに桃園の地を伝領した藤原行成が長保三年（1001）に建立した世尊寺、行成から世尊寺地を請い受けた平親信が世尊寺西隣に建立した尊重寺など、皇族や貴族たちによって開発されていった。

室町時代には、室町殿や武家屋敷などが建ち並ぶ上京の市街地の一画に位置することとなる。

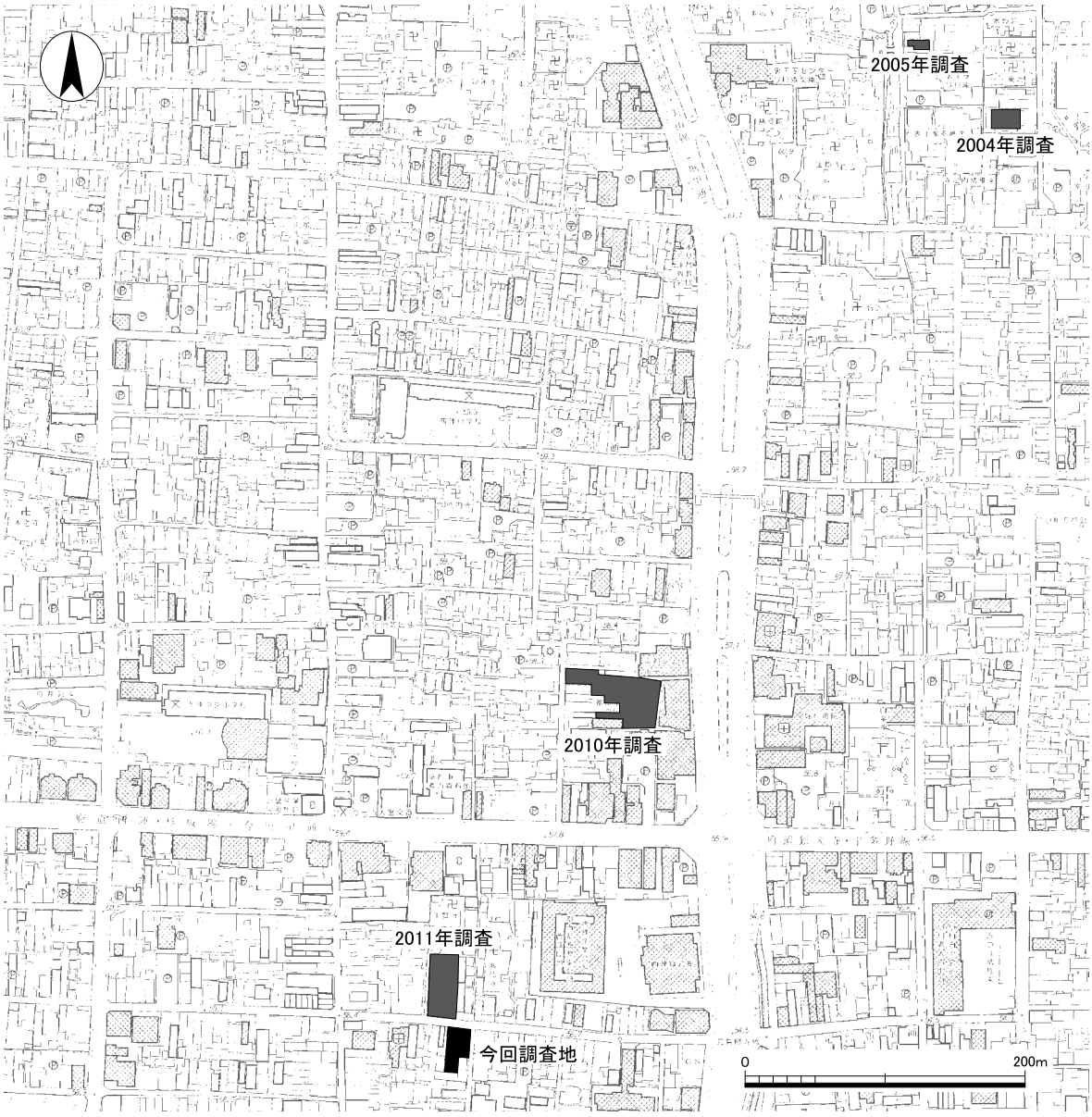


図５　周辺調査位置図（１：5,000）

「応仁・文明の乱」時には山名宗全邸に西軍の本陣が置かれたことから、戦火を被ったが、乱の後には、織物業者が集住して西陣織の町として発展し、市街地化が進む。また、戦国時代には、武家による戦闘のための備えとして、または公家や庶民による自衛のために、土塁や堀などの構が上京の町のいたる所に築かれた。

安土桃山時代になると、豊臣秀吉が内裏跡地である内野に聚楽第を造営し、その周辺には大名屋敷が建設される。

（2）周辺の調査

今回の調査地の元誓願寺通を挟んだ北西側で2011年に行われた調査[1)]では、平安時代後期から江戸時代までの各時期の遺構・遺物を検出した。平安時代後期から鎌倉時代の遺構としては溝や地下式倉庫などが見つかっており、宅地としての利用がみられる。また、室町時代末期の井戸や堀などがあり、応仁・文明の乱後に町屋が存在したことを窺わせている。

2004年に行われた調査[2)]では、平安時代の土器が多く入った溝を検出し、周辺が居住域であったことがわかる。また、室町時代の柵とそれに平行する溝などが見つかり、洛中洛外図にも描かれる典厩家邸宅に関わる遺構である可能性が高いことを指摘している。また、その北西で2005年に行われた調査[3)]でも、室町時代後期の溝や井戸、江戸時代の井戸や石室、柱穴などを検出している。

2010年に行われた調査[4)]では、室町時代後期から江戸時代にかけての土坑・溝・柱穴列などを検出しており、大規模邸宅の一部と考えられている。

調査地周辺を含む上京では、未だ発掘調査例は多くないが、分布調査[5)]などでも平安時代から近世までの各時代の包含層や遺物を多数確認しており、上京遺跡に該当する室町時代の遺構のみならず、それ以前、あるいはそれ以降の時代の遺構密度も高いことが明らかとなりつつある。

註

1） 小松武彦『上京遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2011－2　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2011年

2） 吉崎　伸『上京遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2004－9　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2004年

3） 長戸満男「上京遺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成17年度』 京都市文化市民局　2006年

4） 布川豊治『上京遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2010－2　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2010年

5） 『京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成22年度』 京都市文化市民局　2011年

参考文献

高橋康夫『京都中世都市史研究』 思文閣出版　1983年

『史料　京都の歴史　7　上京区』 京都市　1980年

３．遺　　構

（１）基本層序（図７・８）

調査地の層序は、現地表面から0.1～0.3ｍまでが現代盛土、その下に約1.0ｍの厚さで江戸時代の整地層である暗褐色細～中砂が堆積している。これらを除去したところで第１面の遺構を検出した。なお、この第１面が調査区のテラス面にあたる。第１面下には、0.6～0.8ｍの厚さで江戸時代初頭の整地層である黄褐色粗砂・褐色粘質細砂が堆積する。さらにその下では、約1.5ｍの厚さで室町時代末期から安土桃山時代の整地層である褐色から黄褐色のシルト～細砂が堆積している。この整地層上面を第２面として調査した。第２面は、西壁から約1.5ｍ東の地点で、0.4ｍ落ち込む。試掘坑の東側断面を観察すると、北に向かって落ち込むことが判明した。上層は土師器小片などの遺物を多く含み、下層は遺物に加えて拳大の礫が大量に混じった土が堆積する。基本的に土取穴を埋めたものであり、これらを除去した基盤層上面を第３面として調査した。この基盤層はいわゆる聚楽土である。

（２）遺構の概要

上述の通り、検出した遺構面は３面である。

第３面では基盤層上面で調査区全体に広がる土取穴群を検出した。土取穴は、この聚楽土を採取するために掘り込まれたものと考えられる。

第２面では土坑２基を検出した。第２面は確証は得られないものの、第３面と大きく時期差がないとみられる。遺構の時期は、室町時代末期から安土桃山時代である。

第１面では、江戸時代を通して各時期の遺構を検出した。主な遺構は、検出面で成立する江戸時代前期から中期の井戸10・土坑36・瓦敷41・土坑44、検出面より若干上層で成立することを断面観察で確認した江戸時代中期から後期の石室40、現代盛土直下から成立する江戸時代末期の土坑38・石室39である。

（３）第３面の遺構（図６、図版１）

土取穴群　聚楽土を採取した痕跡で、基盤層下の砂礫層まで掘り込んでいる箇所もあるが、基本的に聚楽土が採取できなくなる礫混じり土の上面で掘り止めている。それぞれの土取穴の大きさ・形状に規則性はみられず、不定形に掘り込まれている。聚楽土採取後この土取穴群は、上層約0.6

表１　遺構概要表

時　　代	遺　　構
室町時代末期～安土桃山時代	土取穴群、土坑11・12
江戸時代	井戸10、土坑36・38・44、石室39・40、瓦敷41

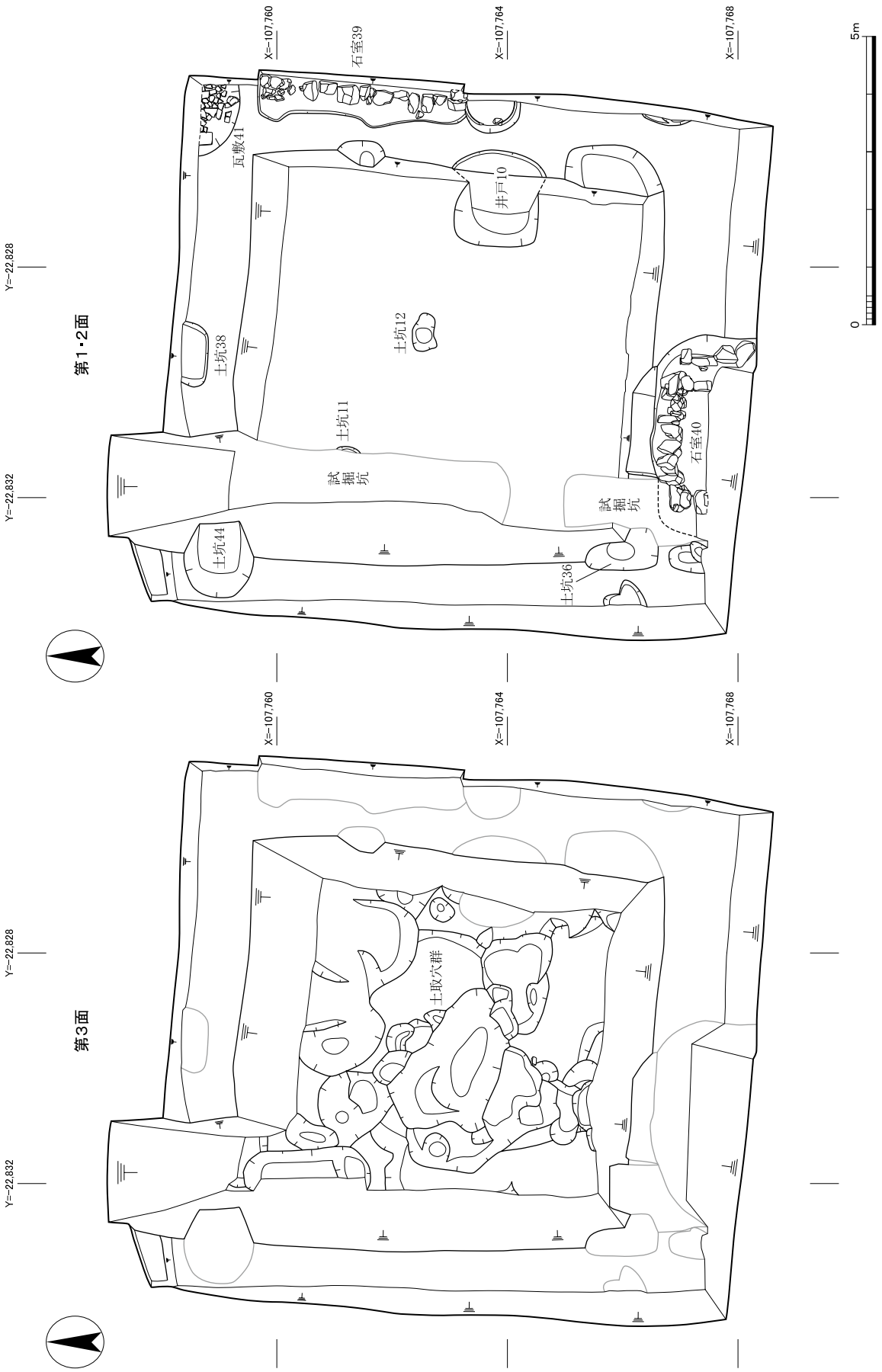
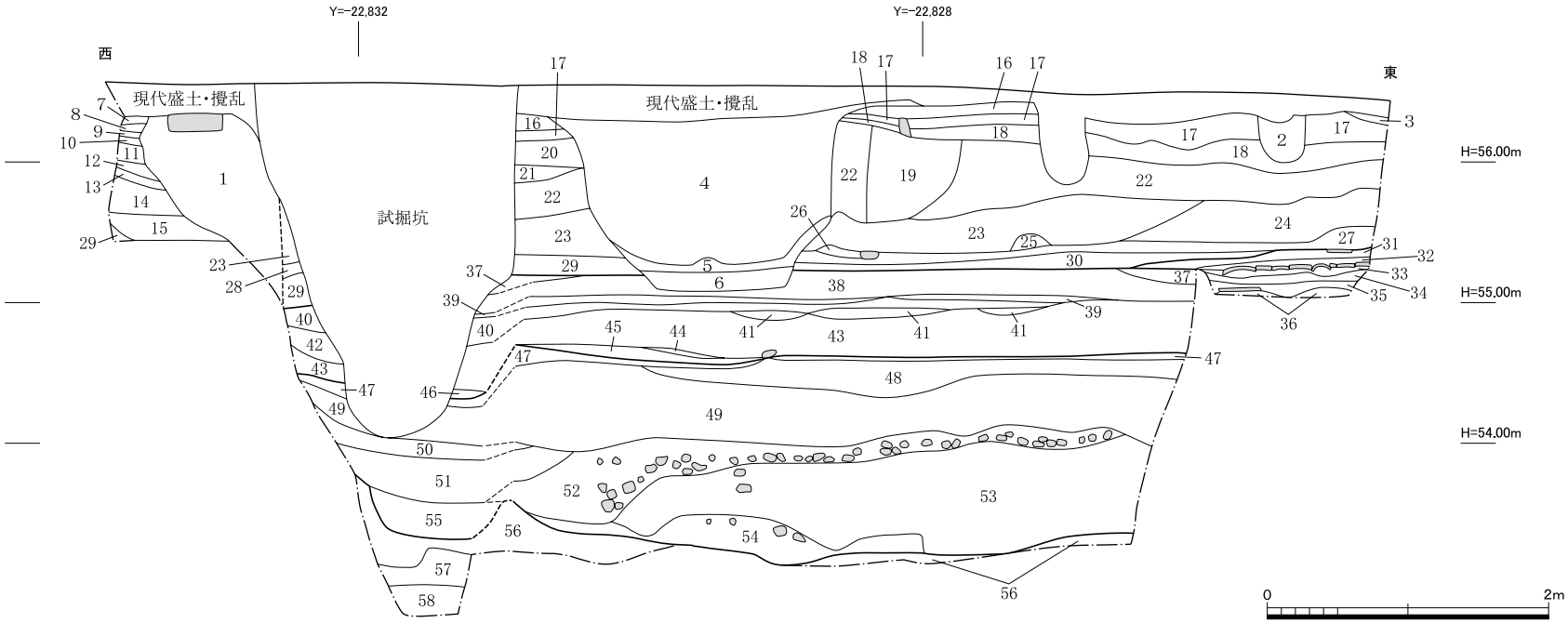
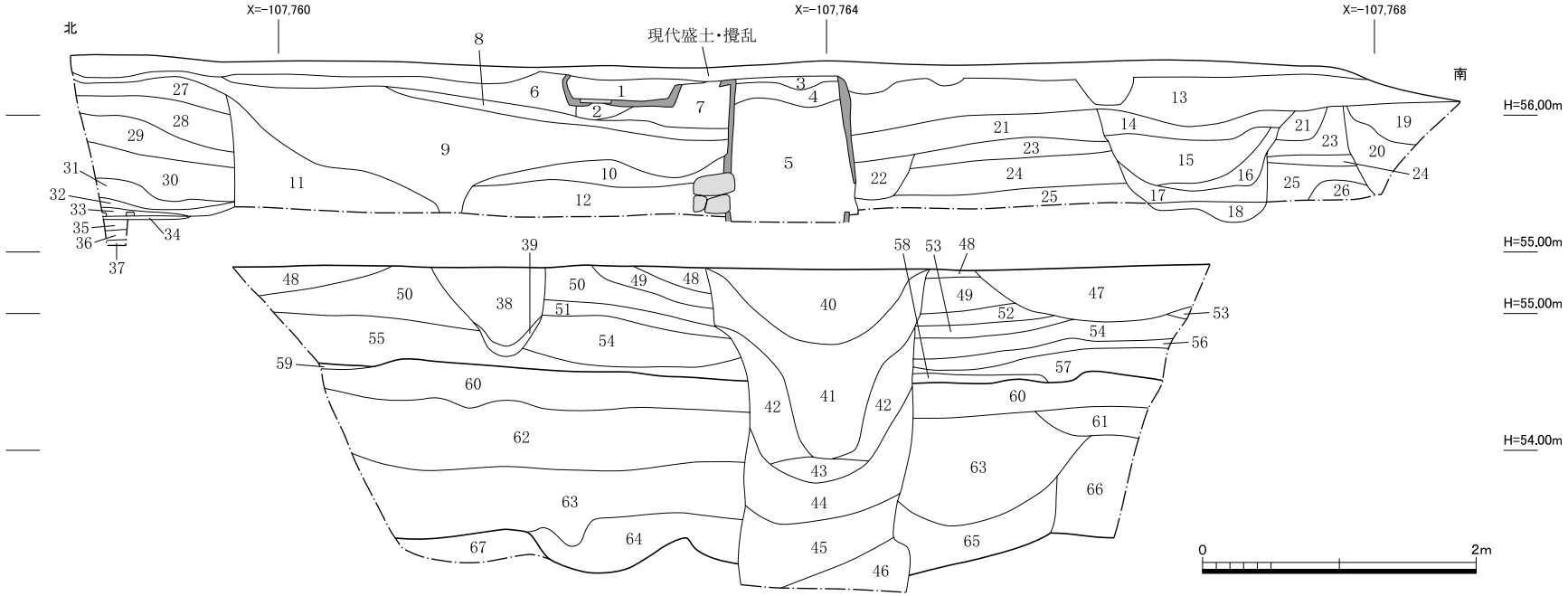


図６　調査区平面図（１：100）



1 10YR7/3 にぶい黄橙色粗砂　φ10cm程度の礫多量混〔井戸〕
2 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂(粘質)
3 2.5YR4/8 赤褐色粗砂　炭・焼け瓦多量混
4 5YR3/6 暗赤褐色焼土・細砂～中砂　焼け瓦多量混
5 5YR1.7/1 黒褐色細砂　ほぼ炭
6 10YR3/3 暗褐色細砂(粘質)　炭少量混
〔土坑38〕
7 10YR3/4 暗褐色細砂(粘質)　焼土少量混
8 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂(粘質)　焼土少量混
9 10YR3/4 暗褐色細砂～中砂
10 10YR3/3 暗褐色細砂(粘質)
11 10YR3/3 暗褐色シルト～細砂(粘質)　炭多量混
12 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂　φ1cm程度の礫多量混
13 10YR4/2 灰黄褐色細砂(粘質)
14 10YR5/2 灰黄褐色細砂～中砂(粘質)
15 10YR3/4 暗褐色細砂～中砂(粘質)
16 10YR3/3 暗褐色細砂～中砂(粘質)
17 10YR3/3 暗褐色細砂
18 10YR4/4 褐色粗砂　φ3～5cmの礫多量混
19 10YR3/4 暗褐色細砂～中砂(粘質)
20 10YR4/4 褐色細砂～中砂　φ1cm程度の礫多量混
21 10YR5/6 黄褐色細砂～中砂　φ1cm程度の礫多量混
〔江戸時代整地層〕
22 10YR3/3 暗褐色細砂～中砂
23 10YR3/4 暗褐色粗砂　φ1～2cmの礫多量、瓦片混
24 10YR4/4 褐色細砂～中砂
25 10YR3/4 暗褐色細砂
26 10YR4/4 褐色細砂
27 10YR3/3 暗褐色細砂(粘質)
28 10YR3/3 暗褐色シルト～細砂(粘質)
29 2.5Y4/3 オリーブ褐色細砂
30 10YR4/4 褐色細砂(粘質)
〔江戸時代整地層〕
31 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト～細砂(粘質)
32 10YR2/2 黒褐色シルト～細砂　やや締まる
33 10YR2/2 黒褐色シルト～細砂(粘質)
34 10YR2/3 黒褐色シルト(粘質)　炭が帯状に入る
35 10YR5/2 灰黄褐色細砂～中砂　固く締まる
〔瓦敷41〕
36 10YR2/2 黒褐色粘土～シルト
37 10YR5/4 にぶい黄褐色細砂　φ1cm程度の礫多量混
38 10YR6/4 にぶい黄橙色細砂　φ1～10cmの礫多量混
39 10YR6/3 にぶい黄橙色細砂
40 10YR5/4 にぶい黄褐色細砂　固く締まる
41 10YR4/4 褐色細砂
42 10YR3/4 暗褐色細砂　φ1cm程度の礫多量混
〔江戸時代初頭整地層〕
43 10YR6/4 にぶい黄橙色中砂～粗砂　φ3～10cmの礫多量混
44 10YR5/1 褐灰色細砂
45 10YR6/6 明黄褐色細砂　φ1cm程度の礫多量混
46 2.5Y4/2 暗灰黄色細砂～中砂(粘質)
〔江戸時代初頭整地層〕
47 10YR5/1 褐灰色細砂　固く締まる
48 10YR3/4 暗褐色細砂　固く締まる　φ1～3cmの礫多量、炭・土師器片混
49 10YR4/4 褐色細砂　φ1cm程度の礫多量、土師器片多量混
50 2.5Y3/2 黒褐色シルト(粘質)
51 10YR4/2 灰黄褐色シルト＋10YR5/4 にぶい黄褐色シルトブロック多量混　φ1～5cmの礫中量混
52 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト～細砂(粘質)　φ5～10cmの礫多量混
53 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト～細砂(粘質)　φ1cm程度の礫中量、土師器片中量混
54 10YR4/4 褐色シルト～細砂(粘質)　φ5～10cmの礫少量混
55 10YR4/6 褐色シルト～細砂
〔室町時代末期から安土桃山時代整地層〕
56 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト(粘質)
57 10YR4/4 褐色シルト(粘質)　φ1～5cmの礫中量混
58 10YR4/4 褐色粘土～シルト　φ1～10cmの礫多量混
〔基盤層〕

図7　調査区北壁断面図（1：50）



1 2.5Y3/2 黒褐色細砂～中砂
2 2.5Y5/3 黄褐色細砂
3 2.5Y4/3 オリーブ褐色粗砂
4 2.5Y5/2 暗灰黄色細砂～中砂
5 10YR4/4 褐色細砂　φ5～10cmの礫多量混
6 10YR3/4 暗褐色細砂(粘質)
7 10YR3/3 暗褐色細砂
8 10YR2/3 黒褐色細砂(粘質)　炭・焼土・瓦片多量混
9 2.5YR4/8 赤褐色粗砂　炭・焼け瓦多量混
10 10YR3/3 暗褐色細砂～中砂(粘質)　炭・瓦片少量混
11 5YR2/4 極暗赤褐色中砂　炭・焼け瓦少量混
12 5YR4/6 赤褐色中砂　焼け瓦・瓦片多量混
13 10YR3/3 暗褐色中砂　φ1cm程度の礫多量混
14 10YR3/3 暗褐色中砂(粘質)
15 10YR3/3 暗褐色細砂～中砂
16 10YR2/3 黒褐色細砂(粘質)　炭多量混
17 10YR3/4 暗褐色細砂(粘質)
18 10YR2/2 黒褐色シルト～細砂(粘質)　炭多量混
19 10YR2/2 黒褐色細砂(粘質)　瓦片多量混
20 10YR3/2 黒褐色細砂(粘質)
21 10YR4/4 褐色中砂～粗砂
22 10YR3/2 黒褐色シルト～細砂　φ10cm程度の礫多量混
23 10YR4/3 にぶい黄褐色粗砂
24 10YR5/2 灰黄褐色細砂(粘質)
25 10YR6/2 灰黄褐色細砂～中砂(粘質)
〔江戸時代整地層〕

26 10YR5/4 にぶい黄褐色細砂(粘質)
27 10YR3/3 暗褐色細砂
28 10YR4/4 褐色粗砂　φ3～5cmの礫多量混
29 10YR3/3 暗褐色細砂～中砂
30 10YR4/4 褐色細砂～中砂
31 10YR3/3 暗褐色細砂(粘質)
〔江戸時代整地層〕

32 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト～細砂(粘質)
33 10YR2/2 黒褐色シルト～細砂　やや締まる
34 10YR2/2 黒褐色シルト～細砂(粘質)
35 10YR2/3 黒褐色シルト(粘質)　炭が帯状に入る
36 10YR5/2 灰黄褐色細砂～中砂　固く締まる
〔瓦敷41〕

37 10YR2/2 黒褐色粘土～シルト
38 10YR4/6 褐色細砂～微砂　φ1cm以下の礫多量混
39 10YR4/4 褐色細砂～微砂　固く締まる
40 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色細砂
φ1cm程度の礫多量混
41 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂(粘質)
φ1cm程度の礫多量混
42 10YR4/4 褐色細砂～中砂　φ1cm程度の礫多量混
43 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂(粘質)
44 2.5Y3/2 黒褐色細砂(粘質)　＋10YR5/4 にぶい黄褐色細砂ブロック混　φ1cm程度の礫多量混
45 10YR4/3 にぶい黄褐色中砂～粗砂(粘質)
46 10YR3/4 暗褐色シルト～細砂(粘質)
〔井戸10〕

47 2.5Y4/2 暗灰黄色細砂～中砂　φ5～10cmの礫多量混
48 10YR5/4 にぶい黄褐色細砂　φ1cm程度の礫多量混
49 10YR5/6 黄褐色粗砂　φ3cm程度の礫多量混
50 10YR6/4 にぶい黄橙色細砂　φ1～10cmの礫多量混
51 10YR4/4 褐色細砂　固く締まる
52 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト(粘質)
53 10YR4/2 灰黄褐色シルト～細砂(粘質)
54 10YR4/4 褐色細砂　φ5～10cmの礫多量混
55 10YR6/4 にぶい黄橙色中砂～粗砂
φ3～10cmの礫多量混
56 10YR3/4 暗褐色細砂
57 10YR4/4 褐色細砂～中砂(粘質)
58 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト
〔江戸時代初頭整地層〕

59 10YR5/1 褐灰色細砂　固く締まる
60 10YR3/4 暗褐色細砂　固く締まる
φ1～3cmの礫多量、炭・土師器片混
61 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト～細砂
φ5～10cmの礫多量混
62 10YR4/4 褐色細砂　φ1cm程度の礫多量、土師器片多量混
63 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト～細砂(粘質)
φ1cm程度の礫中量、土師器片中量混
64 10YR4/4 褐色シルト～細砂(粘質)
65 10YR3/3 暗褐色シルト(粘質)　土師器片中量混
66 10YR4/4 褐色シルト～細砂(粘質)
67 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト(粘質)　(基盤層)
〔室町時代末期から安土桃山時代整地層〕

図８　調査区東壁断面図（１：50）

mに土器小片を多く含んだ埋土、下層約0.9mに拳大の石を大量に混ぜた埋土という、２段階で整地したことが断面から確認できる（図７－47～55層、図８－59～66層）。縄文時代から安土桃山時代の遺物が出土した。

（４）第２面の遺構（図６、図版１）

土坑11　調査区北西で検出した焼土坑である。直径0.3m以上、深さは0.15mを超えるとみられるが、西側の大部分が試掘坑によって失われており、遺構の全体像は不明。土坑の埋土は上下２層に分かれ、壁面と上層は被熱で赤くなり、下層には炭が詰まる。土師器片が出土したが、細片のため図化できなかった。

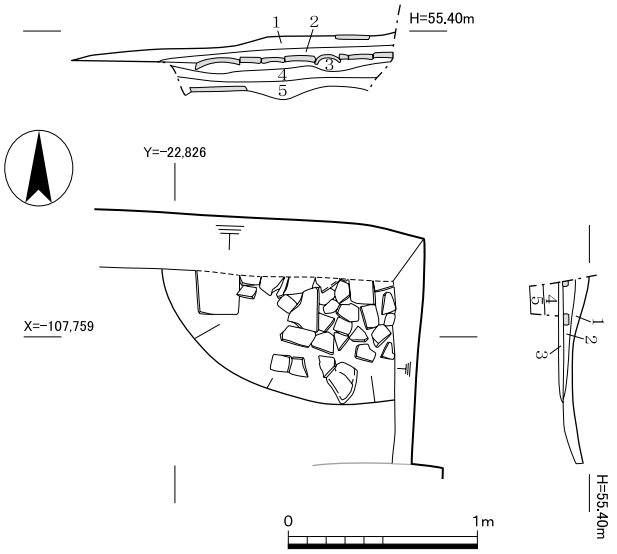
土坑12　調査区のほぼ中央で検出した土坑である。東西約0.65m、南北約0.4m、深さ約0.5mで不定形。遺物は貝殻１点のみが出土した。下層には炭が詰まり、その上に（図７－北壁43層）にみられる黄色の礫混じり粗砂が堆積していた。

（５）第１面の遺構（図６）

井戸10　調査区東部で検出した井戸である。西側半分が掘り下げによって失われるが、一辺約1.7mの隅丸方形の掘形とみられる。深さは2.4mを超える。底部は確認できなかった。井戸枠などの痕跡はみられない。埋土には、直径１cm程度の礫が大量に混じる。出土遺物は、江戸時代前期の土器類が中心で、北宋銭が１点出土している。

土坑36　調査区南西部で検出した土坑である。南北約1.2m、東西0.7m以上で、東側半分が掘り下げによって失われるが、隅丸方形とみられる。江戸時代前期から中期の遺物が出土した。

瓦敷41（図９）　調査区北東隅で検出した平瓦を敷いた瓦敷である。南北0.6m以上、東西1.2m以上、深さ約0.2mの掘形の上面に瓦を敷き、その上をやや締まった土で覆う。瓦敷は、さらに北へ続くことが確認できるが、東への続きは確認できなかった。敷かれていた平瓦は、完形や割れたものなど大きさが一定ではないが、割れた瓦は形状を整えるなどしており、人為的に敷かれたものであることがわかる。使用した瓦は、北壁断面で確認した丸瓦１点以外は、すべて平瓦である。瓦敷の周辺には非常に固く締まった土が広がり、関連する平坦面が広がっていた可能性が高い。

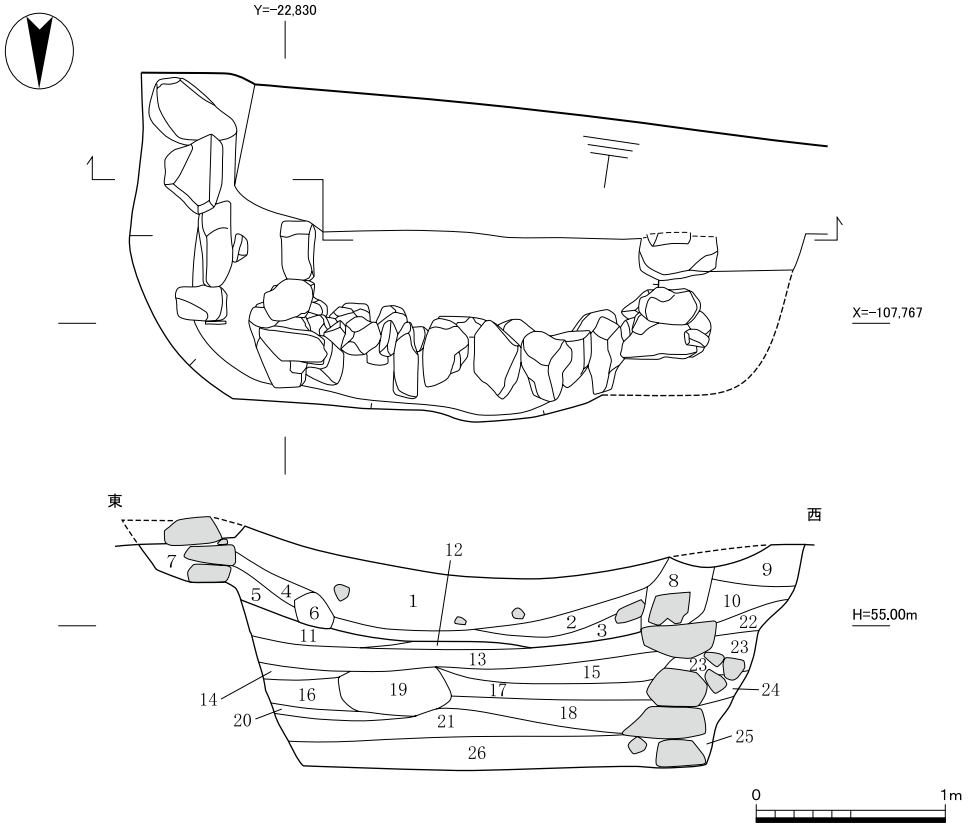


1　10YR4/3 にぶい黄褐色シルト～細砂（粘質）
2　10YR2/2 黒褐色シルト～細砂　やや締まる
3　10YR2/2 黒褐色シルト～細砂（粘質）
4　10YR2/3 黒褐色シルト（粘質）　炭が帯状に入る
5　10YR5/2 灰黄褐色細砂～中砂　固く締まる

図９　瓦敷41実測図（１：40）

土坑44　調査区北西部で検出した瓦溜土坑である。検出面では直径約1.2ｍの円形を呈し、底部は一辺0.7ｍ以上の隅丸方形になる。深さは約1.2ｍ。東側半分が試掘坑によって失われる。近世初頭の瓦類が大量に出土した。また、この中から金箔瓦が１点出土した。

石室40（図10、図版２）　調査区南部で検出した石室である。掘形は南北1.5ｍ以上、東西約3.5ｍ、深さ約1.2ｍの隅丸方形とみられる。掘形の西端が試掘坑によって失われていた。石積み内は南北0.5ｍ以上、東西約1.8ｍである。石材は花崗岩。東側では石列が階段状に２段並列し、上段石列は南へ続くが、下段石列は続かない。北側では石積みが３段分確認できる。南壁断面では、西側の石積みが５段分確認できる。２～６層上面は固く締まっており、床土と考えられる。東側の２段の石積みはこの床土を境にして東西にずれることから、新旧の積み直しと考えられる。しかし、出土遺物は新旧どちらも江戸時代中期から後期のもので、大きな時期差はみられない。



1　2.5Y3/2 黒褐色シルト～細砂　炭中量混
2　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト～細砂(粘質)
　固く締まる　φ1～3cmの礫少量混
3　10YR4/4 褐色シルト～微砂(粘質)　固く締まる
　＋2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト～細砂ブロック中量混
4　10YR3/4 暗褐色シルト～細砂(粘質)　固く締まる
　＋10YR4/4 褐色シルト～細砂ブロック少量混
5　10YR2/2 黒褐色シルト～細砂(粘質)
　φ1～3cmの礫少量混
6　10YR4/4 褐色シルト～細砂(粘質)　固く締まる
　＋10YR3/2 黒褐色シルト～細砂ブロック少量混
〔新段階床土〕
7　10YR2/2 黒褐色シルト～細砂(粘質)
8　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト～微砂(粘質)
9　10YR3/3 暗褐色細砂(粘質)　φ1～5cmの礫多量、炭多量混
10　10YR3/4 暗褐色シルト～微砂(粘質)
11　10YR3/2 黒褐色細砂～中砂(粘質)
12　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト～細砂(粘質)
　＋10YR4/3 にぶい黄褐色シルト～細砂(粘質)ブロック中量混
13　2.5Y3/2 黒褐色シルト～細砂(粘質)
14　10YR2/2 黒褐色シルト～細砂(粘質)
15　10YR3/1 黒褐色シルト～微砂(粘質)
16　10YR2/3 黒褐色シルト～細砂(粘質)
17　2.5Y3/1 黒褐色細砂(粘質)
18　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色細砂(粘質)
19　2.5Y4/2 暗灰黄色シルト～細砂(粘質)
20　2.5Y3/2 黒褐色シルト＋10YR6/8 明黄褐色シルト(粘質)ブロック混
21　2.5Y4/2 暗灰黄色シルト～中砂　φ0.5cm程度の礫多量混
22　10YR4/4 褐色シルト(粘質)
23　10YR3/4 暗褐色シルト(粘質)　φ0.5～1cm程度の礫中量混
24　2.5Y4/2 暗灰黄色粘土～シルト　φ1～3cmの礫中量混
25　2.5Y4/3 オリーブ褐色粘土～シルト
26　2.5Y4/4 オリーブ褐色粘土～シルト〔旧段階床土〕

図10　石室40実測図（１：40）

土坑38　調査区北部で検出した土坑である。現代盛土直下から成立する。東西約2.0ｍ、深さ約1.2ｍであることが、北壁断面で確認できる。底部には炭が詰まり、土坑全体に焼土が詰まる。遺物は陶器や桟瓦、炭化した木材や焼壁土などが出土した。小片のため図化できなかったが、19世紀代のものとみられる。

石室39　調査区東部で検出した石室である。掘形は南北約3.6ｍ、東西0.8ｍ以上である。西面の石積み１段分10石及び南面の石積み２段分が残ることが東壁で確認できるが、北面の石積みは崩れている。石室として利用していた土坑に焼土が廃棄されたものとみられる。廃棄の際に掘形の上部を崩して焼土を放り込んでおり、石室自体の掘形上端は確認できない。遺物は陶器・硯・桟瓦など出土した。硯以外は小片のため図化できなかったが、19世紀代のものとみられる。

土坑38・石室39では、同じ焼土が混じることから、近隣で火災が起き、その際の火災処理土坑群であると考えられる。

４．遺　　物

（１）出土遺物の概要

今回の調査では整理コンテナで23箱の遺物が出土した。検出した遺構に対応した室町時代、江戸時代の遺物のほか、わずかではあるが縄文時代や平安時代から鎌倉時代の遺物も出土した。土師器類が大半だが、江戸時代になると陶磁器類や瓦類の割合が増える。わずかだが、石製品と銭貨などの金属製品も出土した。また、現代盛土直下で成立している土坑38・石室39では、陶器や硯などの日用品や、焼壁土や焼瓦、釘などの建材が出土した。

遺構に伴う遺物としては、井戸10と石室40のものが最も多い。その他は整地層や、土取穴群から出土した遺物である。以下に、出土遺物の概要を報告する[1)]。

（２）土器類（図11・12、図版３、表３）

１）縄文時代、平安時代から鎌倉時代（図11）

縄文時代、平安時代から鎌倉時代の土器類は、土取穴群から出土した。縄文時代の土器、平安時代から鎌倉時代にかけての土師器、瓦器、輸入磁器などがある。

土取穴群出土土器（１～５）　１は縄文時代晩期後半の船橋式の深鉢の口縁部である。

２は土師器皿Shのいわゆるヘソ皿である。底部をやや押し上げる。３は土師器皿Ｓである。底部が厚く平坦。口縁部は端部にかけて薄手になり、まっすぐ立ち上がる。いずれも京都Ⅶ期。４は瓦器椀である。高台をもたず、底が平坦。内面のヘラミガキはやや粗く、底面には花文の暗文を施す。体部はタテに切込みを入れて六輪花とする。５は龍泉窯産の青磁椀である。外面には蓮弁文がある。

表２　遺物概要表

時　代	内　　容	コンテナ箱数	Ａランク点数	Ｂランク箱数	Ｃランク箱数
縄文時代	縄文土器		縄文土器１点		
平安時代～鎌倉時代	土師器、瓦器、輸入磁器、瓦類		土師器２点、瓦器１点、輸入磁器１点、瓦類３点		
室町時代	土師器、瓦器、施釉陶器、焼締陶器、石製品		土師器１点、施釉陶器２点、焼締陶器１点、石製品１点		
安土桃山時代～江戸時代	土師器、施釉陶器、焼締陶器、国産磁器、青花、瓦類、石製品、金属製品、焼壁土		土師器21点、施釉陶器３点、焼締陶器４点、国産磁器６点、青花４点、瓦類10点、石製品３点、銭貨３点、焼壁土１点		
合　計		27箱	68点（４箱）	０箱	23箱

※　コンテナ箱数の合計は、整理後、Ａランクの遺物を抽出したため、出土時より４箱多くなっている。

２）室町時代から安土桃山時代（図11）

室町時代の土器類は、ほとんどが土取穴群から出土した。土師器、瓦器、施釉陶器、焼締陶器などがある。

土取穴群出土土器（６～10）　土師器は皿がほとんどで、小片が大多数を占めており口径を復元できるものが非常に少ない。６・７は土師器皿Ｓである。６は底部が欠損しているが、７は内面底部に微かな凹線の圏線が巡る。いずれも京都Ｘ期。８・９は施釉陶器である。８は瀬戸の卸目皿で、内面と外面に厚く施釉しており、底部は糸切未調整で薄く釉がかかる。９は瀬戸の製品の脚部で、全体に薄く施釉される。底部は糸切未調整。花瓶などの脚部分と考えられる。10は焼締陶器の備前の壷である。口縁部の玉縁は小さく丸みをもつ。

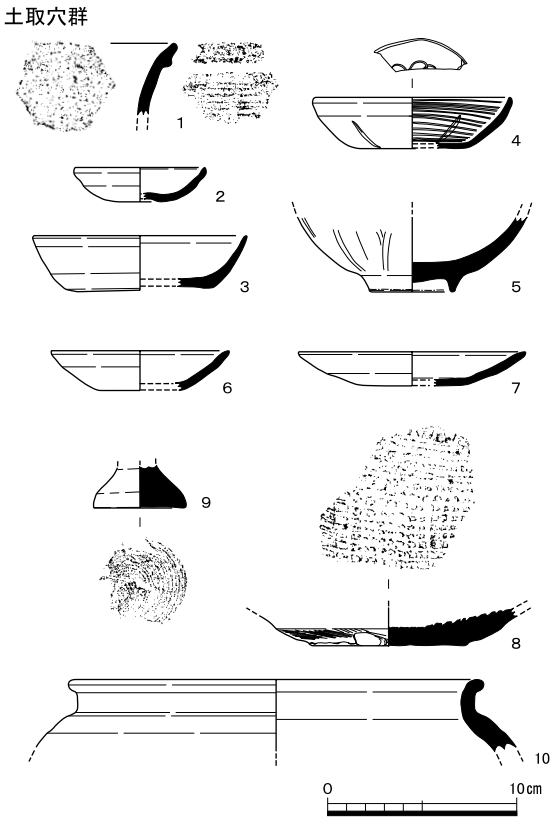


図11　土取穴群出土土器実測図（１：４）

３）江戸時代（図12）

江戸時代の土器類は、第１面の土坑・井戸・石室から、土師器、施釉陶器、焼締陶器、磁器などが出土した。

井戸10出土土器（11～22）　土師器、施釉陶器、焼締陶器、輸入磁器などが出土した。11は土師器皿Sbである。12～14は土師器皿Ｓである。12・13は、内面底部に圏線が明瞭に巡る。11～13は京都Ⅺ期、14は京都Ｘ期で、古い時期のものが混じる。15は炮烙である。口縁部が屈曲して外に開き、端部は面を持つ。外面には全体に煤が付着する。16は施釉陶器の唐津の丸椀である。灰白色の釉で施釉する。17・18は焼締陶器の丹波の擂鉢である。17は胎土に石がほとんど含まれず、明るい赤褐色で、擂り目が単線である。18は胎土に石を多く含み、暗い茶褐色で、５条の擂り目をもつ。19～22は青花である。19は小椀で、体部外面には草花、内面には口縁と底面に圏線を描く。20・21は椀である。20は高台に圏線がある。21は体部の外面には草花、内面と底面にも圏線と絵柄がある。22は皿である。外面は口縁部と高台に圏線がある。内面は口縁部に圏線、底面に描かれるのは獅子の尾とみられる。

土坑36出土土器（23～30）　土師器などが出土した。23は圏線をもたない土師器皿Sbで、口縁部にはオサエが残る。24～30は土師器皿Ｓである。すべて内面底部に凹線の圏線がめぐる。口縁部が直線的に立ち上がり端部は丸みをもつ。特に28は、端部にかけての肥厚が大きい。京都Ⅺ期中段階～Ⅻ期。

石室40出土土器（31～47）　土師器、施釉陶器、焼締陶器、磁器などが出土した。31～33は土

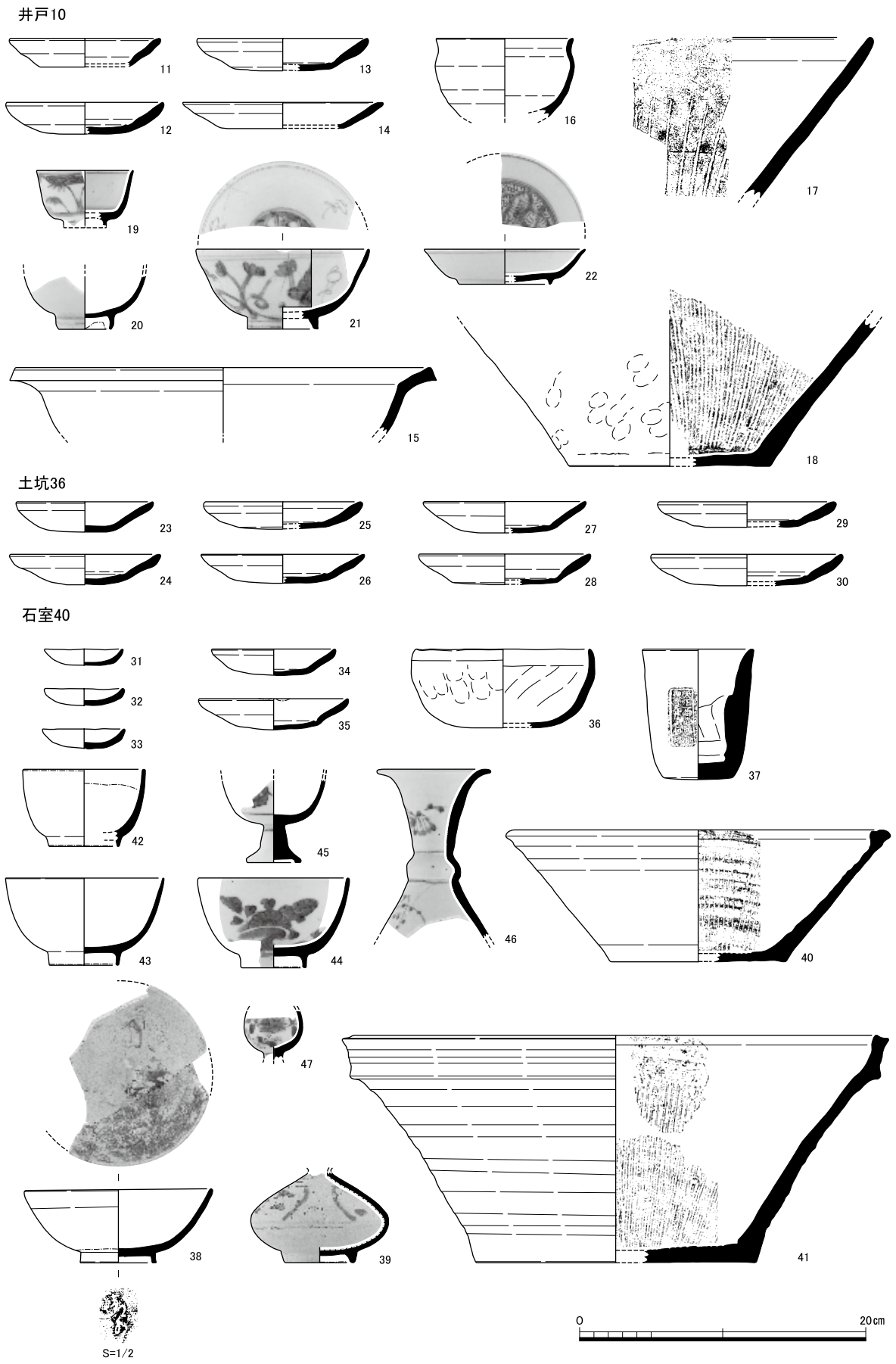


図12　第１面出土土器実測図（１：４）

師器皿Nrである。口径5.0～6.0㎝。34は皿Sbである。35は土師器皿Sである。内面底部に圏線がめぐる。いずれも京都Ⅻ期。36は土師器の丸底の椀である。体部は内彎して、胎土は灰白色。37は焼塩壷である。体部は寸胴で直立気味に立ち上がる。内面には布目痕があり、輪積み成形。外面の体部中央に『天下一御壷□□／堺見なと伊織』の刻印がある。焼壷塩を創始したと伝えられる藤左衛門系の壷塩屋のもので、延宝七年（1679）に伊織の名を受領して、天和二年（1682）に天下一号の禁令が出されるまでの間につくられたものである。38・39は施釉陶器である。38は錆絵椀で、内面に山水文が描かれる。高台に『清水』の銘が入る、京焼風肥前系陶器。39は色絵付の油壷である。体部は扁平で高台が付き、上部には色絵で松などが描かれる。40・41は焼締陶器の信楽の擂鉢である。40は擂り目が７条、41は擂り目が６条である。42・43は白磁椀である。肥前系。44～47は染付磁器である。44は椀である。外面体部には草花や流水が描かれる。45は仏飯具で、外面に草花が描かれる。杯部上半が欠損する。46は仏花瓶で、口縁部から頸部にかけて残り、外面には草花が描かれ施釉される。内面は、口縁部から頸部の上半部まで釉が施される。47は器形は不明であるが、内外面に施釉、外面には草花が描かれており、小型の仏具と考えられる。

（３）瓦類（図13、図版３、表４）

瓦類は、室町時代以前のものも土取穴群から出土したが、近世初頭に作られた瓦が大半を占める。その中でも、土坑44から出土したものが最も多く、次いで第１面上面で出土したものが多い。

土取穴群出土瓦（瓦１・２・９）　瓦１は平安時代後期の複弁蓮華文軒丸瓦とみられる。大半部が欠損しているため文様の全体像は不明。瓦２は鎌倉時代初期の複弁八葉蓮華文軒丸瓦である。小ぶりで瓦当の形がやや扁平となる。珠文は12個。珠文と周縁の間に圏線がめぐる。磨滅が激しく、中房の蓮子の数は不明。

瓦９は鎌倉時代前期の剣頭文軒平瓦である。

土坑44出土瓦（瓦３～６・10・11・13）　瓦類が大量に出土した。

軒丸瓦はすべて右巻三巴文である。巴文の形や珠文の数で、４種類に分類できる。瓦３は巴の尾部が微かに隣の巴に接続する。同文の瓦が６点出土し、瓦当が完形のものはないが、珠文は18個とみられる。瓦当裏面はナデ調整。丸瓦接合部にカキ目がみられる。６点のうち１点には二次的な被熱がみられる。瓦４は巴の尾部が隣の巴にはっきり接続する。珠文は22個。瓦当裏面はナデ調整。丸瓦接合部にはカキ目がみられる。丸瓦部には布目がつく。笵傷から同笵とみられる瓦が３点出土した。瓦５は巴文がやや小さく、巴文と珠文の間に圏線がめぐり、巴の尾部が圏線に繋がる。珠文は15個。瓦当裏面はナデ調整。瓦６は巴がそれぞれ独立する。巴文と珠文の間が狭く、圏線がない。巴の尾部が珠文と接するほど広がる。珠文は14個。瓦当裏面はナデ調整。

軒平瓦は、すべて唐草文である。欠損して全体像が不明なものが多いが、中心飾りが五葉と三葉の２種類にわかれる。瓦10は、五葉の中心飾りと２回反転の唐草文様をもつ。唐草文は繋がる。瓦当上縁は面取りを施す。顎部は貼り付け技法。瓦11は、三葉の中心飾りと２回反転の唐草文をもつ。唐草文はそれぞれ独立する。瓦当上縁は面取りを施す。顎部の成形について、瓦11では確認で

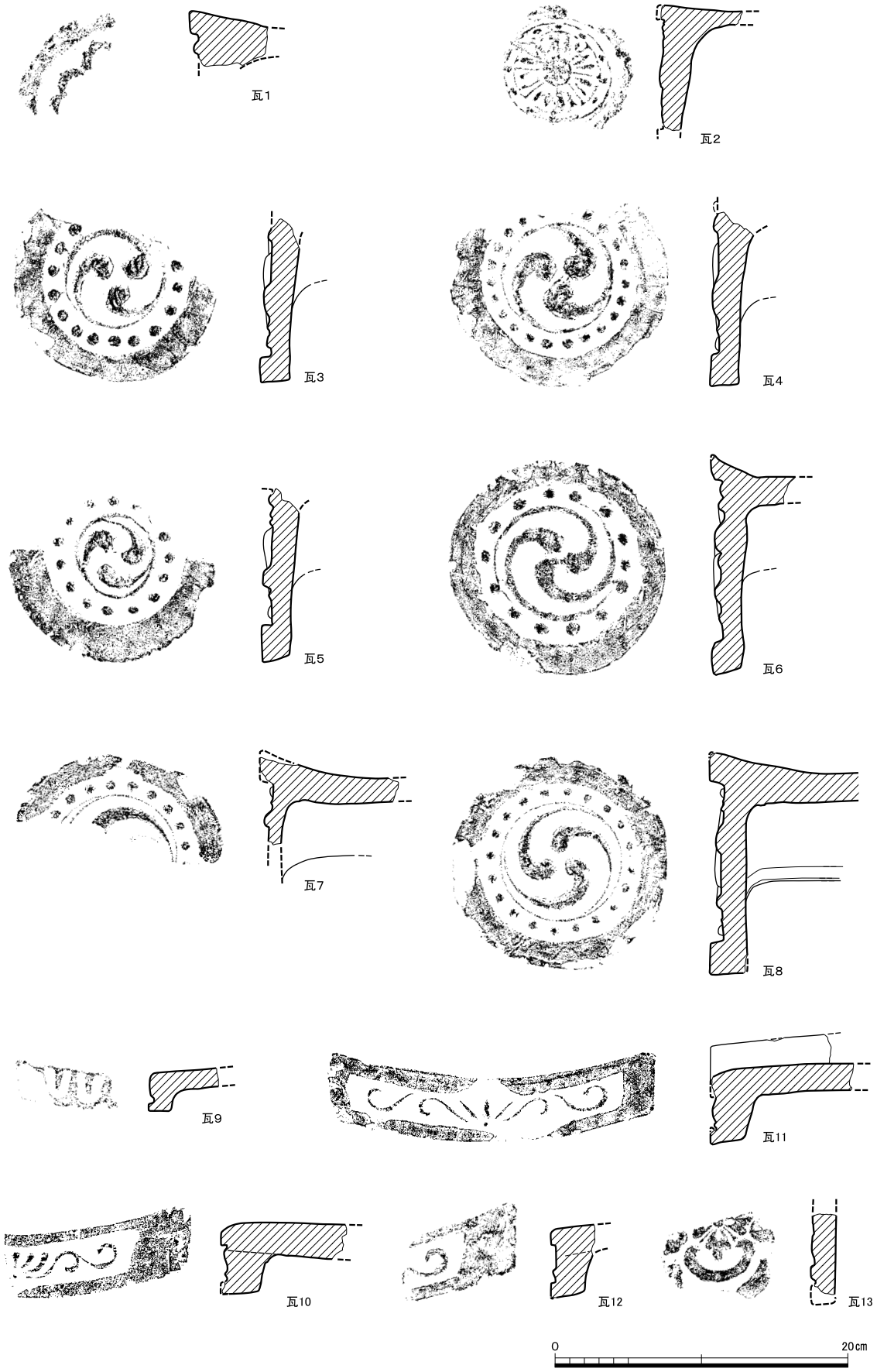


図13　瓦拓影及び実測図（１：４）

きないが、顎部分で欠損した同文瓦でカキ目が確認でき、貼り付け技法である。同文の軒平瓦が４点出土した。

また、金箔瓦（瓦13）が１点出土した。半分以上欠損しているため文様の全体像は不明だが、四葉木瓜文の飾瓦とみられる。唐花部分の描写が細かく丁寧な作りをしている。金箔は凸部分に施される。

第１面北部出土瓦（瓦７・８・12）　遺構に伴うものではないが、第１面上面の堆積土に混じり瓦類が出土した。

軒丸瓦は２点出土した。いずれも左巻巴文で、珠文の間隔はほぼ一致するが周縁の幅や巴の大きさに差異がみられる。瓦７は、圏線をもち巴の尾部が圏線に接続する。半分以上が欠損するが、三巴文とみられる。瓦当裏面はナデ調整。丸瓦部には布目がつく。瓦８は、圏線をもち巴の尾部が圏線に接続する。珠文は20個、瓦７に比べて珠文の粒がやや小さい。丸瓦部の布目が明瞭につく。

瓦12は唐草文軒平瓦。裏面はナデ調整が施される。断面から、顎部が貼り付け技法であることがわかる。

（４）石製品、銭貨、その他の遺物（図14・15、表５）

石製品（石１～４）　土坑36・38、石室39から硯が出土した。すべて長方形を呈するが、大きさと加工が異なる。石材はすべて頁岩や粘板岩とみられる黒色。

石１は出土した中では最も薄く、厚さ約１㎝。表面は、硯縁を0.2㎝残し（海側は0.8㎝）全体を

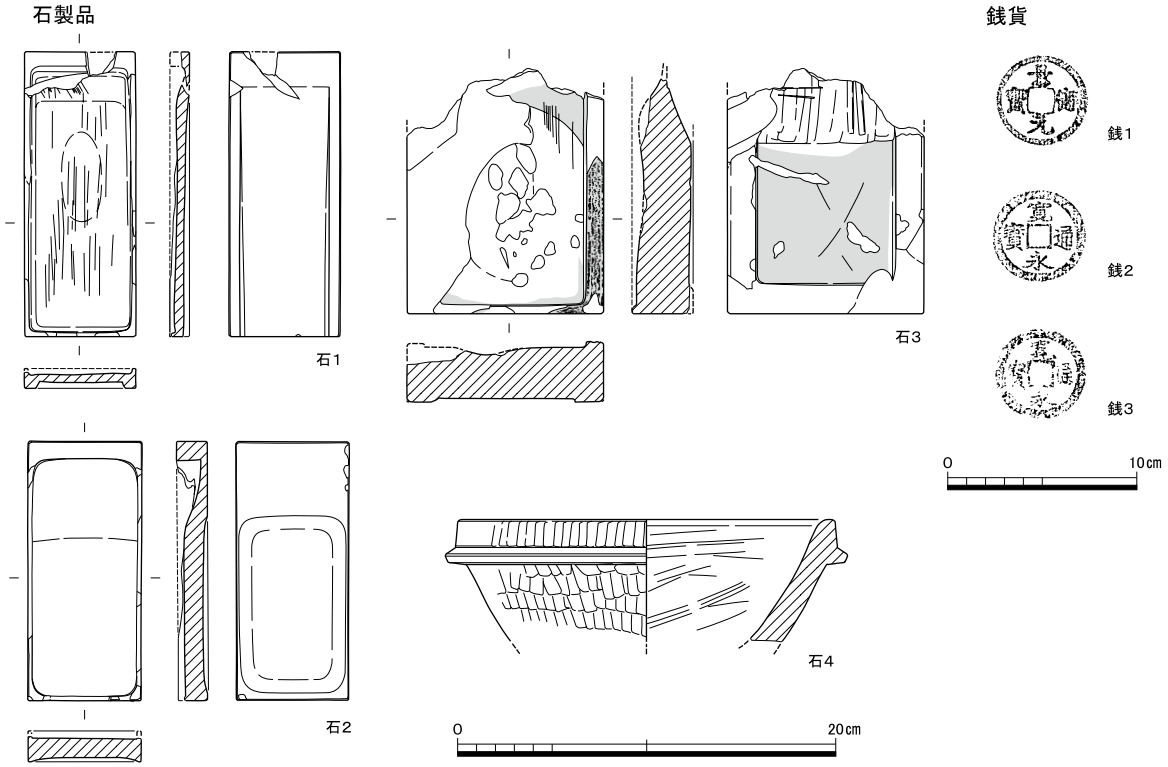


図14　石製品実測図（１：４）、銭貨拓影（１：２）

削り込む。裏面は、側面と先端を残して全面を削り込む。裏面も磨滅しており墨痕があることから、両面を硯として使用したとみられる。

石２は厚さ1.5～1.6㎝で、海側がわずかに厚い。幅は石１とほぼ同じ。表面は、欠損した箇所にも墨痕が付着し、破損しても使用し続けていたことがわかる。裏面は浅く皿状に窪ませ、使用痕はみられない。

石３は他より一回り大きく、海側が欠損する。表面の硯縁、側面、裏面の削り込み内を赤色顔料で塗っている。表面の陸と海にも赤色顔料が残る。硯縁には文様が彫られる。裏面も二次的に掘られて海部が作られ、使用されている。

石４は滑石製鍋である。土取穴群から出土した。口縁部直下に削り出された鍔がめぐり、鍔は断面形が不等辺台形で若干垂れ下る。全体に加工痕が残るが、口縁部は磨滅して体部よりも痕が見えにくい。時期は14世紀代の鎌倉時代後半から室町時代前半。

銭貨（銭１～３）　江戸時代の銭貨が７点出土した。うち４点は重機掘削やあげ土から取り出したもので、それ以外のものを掲載した。

銭１は北宋銭の景徳元寳である。景徳元年（1004年）鋳造。井戸10から出土した。

銭２・３は寛永通寳である。銭２はいわゆる古寛永で、銭３は新寛永。どちらも背面に文字はない。いずれも第１面検出中に出土した。

その他の遺物　土坑38と石室39からは焼けた桟瓦を中心に、被熱した陶器や焼壁土などが出土した。また、炭化した板（マツ科）などの建材がある。焼壁土（壁土１）は厚みが約6.5㎝ある。断面で竹小舞の痕や荒壁土のスサなどが確認できる。土坑38から出土した。

図15　土坑38出土焼壁土（壁土１）

註

１）　土師器の時期と形式名については（Ⅰ）、その他土器類については（Ⅱ）、瓦類については（Ⅲ）（Ⅳ）を参照した。

Ⅰ）　小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年研究」『研究紀要』第３号　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1996年

750頃	840頃	930頃	1010頃	1080～90頃	1180頃	1270頃	1360頃	1440頃	1500頃	1580～90頃	1660頃	1740年代頃	1820年代頃
Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	Ⅷ	Ⅸ	Ⅹ	Ⅺ	Ⅻ	ⅩⅢ	ⅩⅣ
古 中 新	古 中 新	古 中 新	古 中 新	古 中 新	古 中 新	古 中 新	古 中 新	古 中 新	古 中 新	古 中 新	古 中 新	古 中 新	古 中 新

Ⅱ）　中世土器研究会編『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社　1995年

Ⅲ）　山崎信二『中世瓦の研究』奈良国立文化財研究所学報 第59冊　奈良国立文化財研究所　2000年

Ⅳ）　山崎信二『近世瓦の研究』奈良文化財研究所学報 第78冊　奈良文化財研究所　2008年

5．まとめ

今回の調査では、上京遺跡に関わるような建物、また応仁・文明の乱に伴う土塁や堀などの構の遺構は検出できなかった。しかし、室町時代末期から安土桃山時代に大規模な土取りと整地を行った様子が明らかとなった。その後、江戸時代初頭までの間にさらに嵩上げを行い、町屋が形成されている状況も確認できた。

聚楽土の採取が行われた詳細な時期は不明だが、土取穴と整地層の状況から、土取りと整地は短期間で行われたとみられる。この時期にこうした行為が必要な出来事としては、織田信長による元亀４年（1573）の「上京焼き討ち」後の復興や、豊臣秀吉によって天正15年（1587）に建てられた聚楽第や周辺の武家屋敷の建設に伴う造成などの可能性が考えられるが、今回の調査ではそれを裏付けるものは見つかっていない。

その後、江戸時代前期には、嵩上げした土地に町屋が構成され、人々の生活が営まれていたことが、井戸や石室などの遺構の存在からわかる。

また、室町時代末期から安土桃山時代の整地層の中には、縄文時代や平安時代から鎌倉時代の古い時期の遺物も混じることから、鎌倉時代以前の遺構が近隣に存在した可能性が高い。

調査の結果、当地の土地利用の変遷の一端を明らかにできた。しかし、元誓願寺通を挟んだ北隣地の調査結果と比較すると、室町時代以前の土地利用のあり方が異なっており、その解明ができなかったことについての課題が残る。

調査の範囲が限られていたことによって得られた情報が少ないが、今後周辺での調査によって、この一帯の土地利用の様相が明らかになることが期待される。

表３　土器類一覧表

掲載番号	器種	器形	出土遺構	口径(cm)	器高(cm)	色調	備考
1	縄文土器	深鉢	土取穴群		(3.8)	2.5Y5/1 黄灰	縄文時代晩期後半
2	土師器	皿Sh	土取穴群	7.0	1.8	2.5Y8.2 灰白	
3	土師器	皿S	土取穴群	11.2	2.9	5YR8/4 淡橙	
4	瓦器	椀	土取穴群	9.8	2.7	N3/0 暗灰	
5	輸入青磁	椀	土取穴群		(3.9)	N7/0 灰白　釉:5GY6/1 オリーブ灰	龍泉窯
6	土師器	皿S	土取穴群	9.4	2.1	7.5Y8/2 灰白	
7	土師器	皿S	土取穴群	12.0	1.8	7.5YR8/3 浅黄橙	
8	施釉陶器	卸目皿	土取穴群		(2.0)	2.5Y8/1 灰白　釉:7.5Y7/2 灰白	
9	施釉陶器	瓶	土取穴群		(2.3)	2.5Y8/1 灰白　釉:2.5Y7/1 灰白	
10	焼締陶器	甕	土取穴群	21.2	(3.8)	5YR5/2 灰褐　釉:5YR4/2 灰褐	備前
11	土師器	皿S	井戸10	10.4	(2.0)	7.5YR8/4 浅黄橙	
12	土師器	皿S	井戸10	11.0	2.2	7.5YR8/4 浅黄橙	
13	土師器	皿S	井戸10	12.0	2.2	7.5YR8/6 浅黄橙	
14	土師器	皿S	井戸10	14.0	1.9	10YR8/4 浅黄橙	
15	土師器	焙烙	井戸10	29.0	(4.6)	10YR7/3 にぶい黄橙	
16	施釉陶器	椀	井戸10	9.5	(5.5)	2.5Y8/1 灰白　釉:7.5Y7/1 灰白	灰釉、肥前系
17	焼締陶器	擂鉢	井戸10	－	(11.2)	2.5YR5/4 にぶい赤褐	丹波
18	焼締陶器	擂鉢	井戸10		(10.3)	5YR4/3 にぶい赤褐	丹波
19	青花	椀	井戸10	6.7	(3.9)	N8/0 灰白　釉:呉須	
20	青花	椀	井戸10		(3.7)	N8/0 灰白　釉:呉須	
21	青花	椀	井戸10	12.0	5.6	N8/0 灰白　釉:呉須	
22	青花	皿	井戸10	11.0	2.4	N8/0 灰白　釉:呉須	
23	土師器	皿Sb	土坑36	9.6	2.1	7.5YR8/4 浅黄橙	
24	土師器	皿S	土坑36	10.6	2.1	10YR8/1 灰白	
25	土師器	皿S	土坑36	10.8	1.9	10YR7/3 にぶい黄橙	
26	土師器	皿S	土坑36	11.4	2.0	7.5YR7/3 にぶい橙	
27	土師器	皿S	土坑36	11.3	2.2	10YR8/3 浅黄橙	
28	土師器	皿S	土坑36	12.0	2.1	7.5YR7/4 にぶい橙	
29	土師器	皿S	土坑36	12.5	1.8	7.5YR8/2 灰白	
30	土師器	皿S	土坑36	13.4	2.2	7.5YR8/3 浅黄橙	
31	土師器	皿Nr	石室40	5.4	1.1	7.5YR8/4 浅黄橙	
32	土師器	皿Nr	石室40	5.4	1.2	7.5YR8/3 浅黄橙	
33	土師器	皿Nr	石室40	5.7	1.4	7.5YR8/3 浅黄橙	
34	土師器	皿Sb	石室40	8.6	1.8	10YR8/3 浅黄橙	
35	土師器	皿S	石室40	10.4	2.2	7.5YR7/4 にぶい橙	
36	土師器	丸椀	石室40	12.0	5.5	2.5Y7/1 灰白	でんぼ
37	土師器	焼塩壷	石室40	7.7	9.1	5YR6/6 橙	外面体部に刻印
38	施釉陶器	椀	石室40	13.0	5.2	2.5Y8/1 灰白　釉:2.5Y8/3 淡黄	錆絵、「清水」の印刻、京焼風肥前系
39	施釉陶器	壷	石室40		(6.3)	10YR7/2 にぶい黄橙　釉:2.5Y8/2 灰白	色絵
40	焼締陶器	擂鉢	石室40	25.4	9.2	5YR4/3 にぶい赤褐	信楽
41	焼締陶器	擂鉢	石室40	36.7	15.9	5YR6/6 橙	信楽
42	白磁	椀	石室40	8.4	5.4	N8/0 灰白　釉:10YR8/1 灰白	肥前系
43	白磁	椀	石室40	11.0	6.1	N8/0 灰白　釉:10YR8/1 灰白	肥前系
44	染付	椀	石室40	10.4	6.2	N8/0 灰白　釉:呉須	
45	染付	仏飯器	石室40		(5.8)	N8/0 灰白　釉:呉須	
46	染付	仏花瓶	石室40	7.0	(12.0)	N8/0 灰白　釉:呉須	
47	染付	球状製品	石室40		(3.7)	N8/0 灰白　釉:呉須	

表４　瓦類一覧表

掲載番号	種類	文様	出土遺構	色調	備考
瓦１	軒丸瓦	複弁蓮華文か	土取穴群	N3/0 暗灰	
瓦２	軒丸瓦	複弁八葉蓮華文	土取穴群	N5/0 灰	
瓦３	軒丸瓦	右巻三巴文、珠文18	土坑44	N3/0 暗灰	
瓦４	軒丸瓦	右巻三巴文、珠文22	土坑44	N4/0 灰	
瓦５	軒丸瓦	右巻三巴文、珠文15	土坑44	N4/0 灰	
瓦６	軒丸瓦	右巻三巴文、珠文14	土坑44	5YR5/1 灰	
瓦７	軒丸瓦	左巻　巴文	第1面検出中	N3/0 暗灰	
瓦８	軒丸瓦	左巻三巴文、珠文20	第1面検出中	N2/0 黒	
瓦９	軒平瓦	剣頭文	土取穴群	N3/0 暗灰	
瓦10	軒平瓦	五葉唐草文	土坑44	N3/0 暗灰	
瓦11	軒平瓦	三葉唐草文	土坑44	N3/0 暗灰	
瓦12	軒平瓦	唐草文	第1面検出中	N5/0 灰	
瓦13	金箔飾瓦	四葉木瓜文	土坑44	5Y5/1 灰	

表５　石製品・銭貨・その他の遺物一覧表

掲載番号	種類	出土遺構	長さ(cm)	幅(cm)	色調	備考
石１	石製品　硯	土坑36	15.1	5.9	N3/0 暗灰	
石２	石製品　硯	土坑38	13.7	6.0	N1.5/0	
石３	石製品　硯	石室39	(13.0)	10.4	N3/0 暗灰　塗料:7.5R4/6 赤	硯縁に陰刻文様
石４	石製品　滑石鍋	土取穴群	口径19.8	器高(6.5)	N3/0 暗灰(外面)　5Y6/1 灰(内面)	
銭１	銭貨　景徳元寳	井戸10				
銭２	銭貨　寛永通寳(古)	第1面検出中				
銭３	銭貨　寛永通寳(新)	第1面検出中				
壁土１	焼壁土	土坑38		厚さ6.5		

図　　版

1　第３面全景（北から）

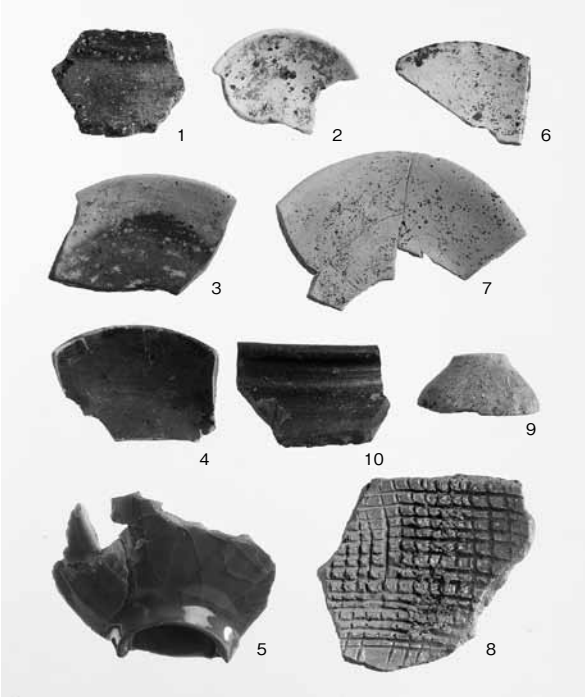
2　第２面全景（北から）

図版２　遺構

１　石室40（北西から）

２　第１面北東部（南西から）

３　瓦敷41（北から）



土取穴群出土土器、出土瓦類

報　告　書　抄　録

ふりがな	かみぎょういせき
書名	上京遺跡
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告
シリーズ番号	２０１８－３
編著者名	末次由紀恵
編集機関	公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
発行所	公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所
発行年月日	西暦2018年10月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
上京遺跡（かみぎょういせき）	京都市上京区（きょうとしかみぎょうく）元誓願寺通大宮（もとせいがんじどおりおおみや）東入寺今町510、512番１（ひがしいるてらいまちょう）	26100	224	35度01分42秒	135度44分59秒	2018年３月28日～2018年５月７日	約90㎡	共同住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上京遺跡	都城跡	室町時代～安土桃山時代	土取穴、土坑	土師器、瓦器、施釉陶器、焼締陶器、瓦類、石製品	
		江戸時代	井戸、土坑、石室、瓦敷	土師器、施釉陶器、焼締陶器、国産磁器、青花、瓦類、石製品、金属製品、焼壁土	

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2018-3

上　京　遺　跡

発行日　2018年10月31日

編　集
発　行　公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

住　所　京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435　℡ 075-415-0521
http://www.kyoto-arc.or.jp/

印　刷　三星商事印刷株式会社

住　所　京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093　℡ 075-256-0961